

新聞の投書記事における「(よ) う」「たい」に付加される「と思う」の機能

金沢じゅん (東京大学大学院生)

1. はじめに

文末の「と思う」には、その主語が必ず一人称単数でなければならないという制約がある。

(1) {私/*私たち/*あなた/*あなたたち/*彼/*彼ら} は、皆が思いやりをもつべきだと思う。

日本語では、ほとんどの場合、「と思う」の主語は明示されない。しかし、その場合でも主語は「私」であると理解されるため、「と思う」は、否定無しに、聞き手や読み手の意識に「私」の存在を喚起させる。

意志の「(よ) う」や希望の「たい」にも、「と思う」と同様に、その主語が一人称単数に限られるという性質がある。

(2) {私/*私たち/*あなた/*あなたたち/*彼/*彼ら} は明日、一人で釣りをし {よう/たい}。

新聞の投書記事では、(3) と (4) のように、「(よ) う」「たい」の後ろに「と思う」が付加されることがある。

(3) 夫のレクチャーはきちんと聞こうと思う。(2016/08/28「枕元に靴 夫の勧め」)

(4) 母の思いを胸に生きていきたいと思う。(2015/07/04「亡き母との思い出」)

(3) と (4) では、「と思う」が無くても、書き手の意志や希望の表出という意味は変わらない。また、引用節の「(よ) う」「たい」によって、その主語が一人称単数であることは明らかであるため、後続する「と思う」が重ねて「私」を喚起させる必要もない。したがって、この「と思う」は、一見、不必要な表現のように思われる。

言語使用には本質的に、話し手から聞き手、書き手から読み手への働きかけが含まれる。しかし、その形態は様々であり、働きかけにもジャンルやレジスターによって固有のメカニズムが存在する (Biber & Conrad, 2009)。話し言葉のインタラクション研究は、近年目覚ましい発展を遂げているが、書き言葉の特有のジャンルについての研究は十分ではない。

そこで、本研究では、新聞の投書記事をコーパスとし、「(よ) う」「たい」が単独で使用される場合と、「と思う」が付加される場合の使い方を分析することで、「と思う」の有無という微細な言語形式の使い分けに、書き手から読み手への働きかけの仕方が反映されていることを提示したい。

2. 先行研究

「(よ) う」「たい」に後続する「と思う」の先行研究では、主に、対話場面を想定した分析がなされている。小野 (2001, 2005) は、希望の「たい」に「と思う」が付くと、聞き手のより深い知識に働きかけると主張する。例えば、(5) では、「と思う」が付かない場合、道順やバスの番号などの情報の提供が求められる一方で、「と思う」が付くと、そのような表層的なものではなく、話し手の進学先や専門性に関わる情報の提供が求められると指摘する。

(5) 筑波大学に行きたい {φ/と思う} んですが。(小野, 2001: 28)

小野の考察は、聞き手の存在が「と思う」の使用の重要な要因となっていることを指摘している点で特筆に値する。しかし、聞き手の回答が発話時の状況や文脈によってどちらにもなりうるという問題点があることは否めない。

宮崎 (1999, 2001) は、意志の「(よ) う」に「と思う」が付く場合、「と思う」の有無によって、話し手の意思決定のタイミングの違いが表されると指摘する。「(よ) う」が単独で使用される場合は「約束」の意味合いが生まれるのに対し、「と思う」が付加される場合、「予定」の色合いが強まると主張する。宮崎の説明は、対話場面での「と思う」の説明としては妥当だと思われるが、投書における「と思う」の有無による意味の差を説明することは難しい。例えば、(6) では、書き手の意思決定のタイミングに差があるとは言えず、「約束」や「予定」という違いも現れない。

(6) 遊び上手な私だが、年齢的にいつまでできるだろう。長く楽しむためにも、ラジオ体操や散歩を続けて、体力を保とう {φ/と思う}。(2015/01/10「けん玉再びブーム 10年前から楽しむ」)

仁田 (1991b: 222) は、意志の「(よ) う」に「と思う」が付く場合、「と思う」の引用節に内的発話や独り言を含むことができるものの、「と思う」が付加された文全体は、対話場面でのみ使用されないと指摘する。これは、「と思う」が独り言を対話としての発話へと変化させることを示唆する点で重要である。しかし、書き言葉では、独り言か対話かという区別はなされず、また、読み手が意識された投書では、読み手が不在の純粋な独り言は成立し得ない。

先行研究を見ると、「(よ) う」「たい」に付く「と思う」は、対話場面における分析はなされているものの、書き言葉

における分析は不十分であり、投書における「と思う」の有無がどのような差をもたらすのかということについては、依然として議論の余地が残されていると言える。

3. 分析対象

分析するデータは、『読売新聞』（東京版、朝刊）の投書欄「気流」に掲載された投書記事である。投書は、一般の読者が書き手となり、様々な話題についての意見が述べられた短い文章である。その内容は、時事問題に対する賛否や要望が論説的に述べられたものから、書き手の個人的な見聞や体験が随筆的に述べられたものまで多岐に渡るが、紙面に掲載されることを期待して投稿されるため、編集者や一般読者などの読み手の存在が強く意識された文章であると言える。

本研究では、意志の「(よ) う」と「(よ) うと思う」、希望の「たい」と「たいと思う」を分析対象とする。なお、文末で用いられ、普通体である場合を分析対象としているため、文中に現れるものや丁寧体は含めない。記事は、読売新聞記事データベース『ヨミダス歴史館』を用いて収集し、2015年～2017年（3年分）に見られる当該表現を全て分析した。意志の「(よ) う」は40例、「(よ) うと思う」は43例、希望の「たい」は762例、「たいと思う」は66例見られた。

4. 分析

「(よ) う」「たい」に付加する「と思う」は、引用節の内容に応じて、二つの機能を発揮する。

(7) a. [書き手にしか当てはまらない個人的な内容]

例) 今年も趣味の登山を続け{(よ) う/たい} と思う。 →読み手への宣言であることを明示

b. [読み手にも当てはまる一般的な内容]

例) マナーを守って電車を利用し{(よ) う/たい} と思う。 →動作主体から読み手を排除

(7a) のように、引用節の内容が書き手にしか当てはまらない個人的なものであり、「(よ) う」「たい」が書き手の意志や希望の表出であることが明白な場合、「と思う」は、読み手の存在を喚起し、引用節の内容を宣言として読み手に伝える。一方で、(7b) のように、引用節の内容が読み手にも当てはまり得るような一般的なものである場合、「と思う」は、動作主体に読み手が含まれるという解釈の可能性を排除し、引用節が書き手の個人的な決意であることを明示するのである。以下、「(よ) う」「たい」が単独で使用される場合と、「と思う」が付く場合とで、比較しながら論じていく。

4.1 「と思う」が書き手にしか当てはまらない個人的な内容と共起する場合

4.1.1 「(よ) う」と「(よ) うと思う」の比較

「(よ) う」には、話し手の意志を表したり、聞き手への誘いかけを示したりする用法がある（仁田，1991a）。

(8) a. [独り言として] さて、そろそろ休憩にしよう。

b. [聞き手を前にして] 今度、遊園地に行こう。

(8a) のように、「(よ) う」の動作主体が話し手のみであると判断される場合、「(よ) う」は、話し手の意志の表出として解釈される。一方で、(8b) のように、動作主体に聞き手も含まれると判断される場合、聞き手への誘いかけの意味になる。つまり、「(よ) う」は、動作主体に聞き手を含めるのか否かによって、意味の違いが生じるのである。

投書では、ほとんどの場合、「(よ) う」の主語は明示されないため、その動作主体を前後の文脈から判断しなければならないが、書き手にしか当てはまらない個人的な内容と共起する場合は、「(よ) う」の主語が書き手のみであることが明白であるため、意志の表出と判断される。

本研究のデータでは、このタイプの「(よ) う」は、独り言的な文脈に現れる傾向にあった。

(9) (前略) 職場に自分の傘を忘れてきたため、とっさに(孫が生まれる前に亡くなった)父の傘を手にとり、子どもの手を引いて保育園へと急いだ。道中、ふと傘を持つ手に温かさを感じた。私を介して父が、孫の手を握っているような感覚がしたのだ。そういえば父は、「俺が保育園に連れていくんだ」と張り切っていたっけな。また雨の日の送迎は、父の傘を使おう。この子が大きくなって、じいじの傘を使ってくれるといいな。それまで壊れないといいけど。 (2017/06/04「子の送迎 じいじの形見で」)

(9) の下線部の「(よ) う」の文は、書き手にしか当てはまらない個人的な内容であるが、その前後の文脈である波線部には、「張り切っていたっけな」「使ってくれるといいな」などの独り言の表現が用いられており、下線部も、その独り言の一部として解釈できる。先述の通り、投書では聞き手不在の純粋な独り言は成立し得ない。しかし、読み手が強く意識された投書において、あえて独り言的な表現が使われると、あたかも、書き手が読み手の存在を意識していないように見せることが可能となる。それによって、読み手に伝えることを意図せずに、書き手の本音が漏れ出てしまったかのような印象を与えるのである。

一方で、「(よ) うと思う」は、(10) の下線部のように、読み手に働きかける文脈で用いられていた。

- (10) 着物は美しい姿勢でなければ、美しく着られないという。そこが着物を着る上で難しいことだが、習い始めた頃は何も分からなかった私も、最近では背筋を意識して着付けをすることができるようになった。今年は着物を着て、夏祭りや花火大会に出かけてみようと思う。皆さんも着物を着て、和の心を感じてみてはいかがでしょうか。 (2017/06/29「美しい姿勢で和の装い」)

(10) の波線部では、読み手を指す「皆さん」という呼称と共に、「いかがですか」という表現が用いられ、読み手に行動が呼びかけられているが、「(よ) うと思う」は、その直前の下線部に現れている。本研究のデータでは、(10) のように、読み手に何らかの行動を呼びかける文が続く場合、「(よ) う」には必ず「と思う」が後接されていた。このことは、「と思う」には、書き手が読み手の存在を意識し、読み手に向けて伝えていることを明示する機能があることを示唆する。

先述の通り、文末の「と思う」は読み手の意識に「私」を喚起させるが、「(よ) う」に「と思う」が付くことで、すでに前提となっている書き手の存在が表面化され、翻って、書き手と対峙する読み手の存在が意識させるのである。したがって、「(よ) う」は、単独で使用される場合、読み手を意識していないかのように見せる表現となるが、「と思う」が付くと、読み手に向けて伝えているという書き手の意図が明示される。引用節で示された書き手の心づもりは、読み手に向けられていることが明示的な場合、読み手に対する宣言となる。「と思う」は、書き手と対峙する読み手の存在を喚起することで、引用節の内容を読み手に対して宣言する文へと変化させるのである。

その証左として、(9) の下線部の「(よ) う」に「と思う」を後接させるとやや唐突な印象になることが挙げられる。

- (11) そういえば父は、俺が保育園に連れていくんだと張り切っていたっけな。?また雨の日の送迎は、父の傘を使おうと思う。この子が大きくなって、じいじの傘を使ってくれるといいな。それまで壊れないといいけど。

これは、「と思う」によって、文全体が読み手への宣言として解釈されるため、読み手を意識していないかのように見せている前後の文脈に合わなくなるからであると考えられる。

4.1.2 「たい」と「たいと思う」の比較

「たい」についても、「(よ) う」の場合と同様に考えられる。「たい」が単独で用いられ、書き手の個人的な内容と共に共起する場合、「たい」は独り言的な表現の前後に現れる傾向にあった。例えば、(12) では、波線部において独り言的な表現の「かな」が用いられていることから、それに続く下線部の「たい」の文も、書き手の思考内容の吐露と解釈できる。

- (12) 7年前に夫を亡くし、ふさぎ込むより何か新しいことをと始めたマラソンが元気のもとになっている。(中略)若い人にはかなわないと思いながらも、流れについていき、ゴールすると、なんと「女子60歳以上」で4位。メダルを手に、これまで頑張って続けて良かったとしみじみ思った。夫からのごほうびかな。これからも走り続けたい。 (2015/12/16「マラソン続け ごほうびかな」)

一方で、「たいと思う」の文は、特定の読み手に宛てていることが明白な文が続くことがあった。(13) では、波線部において、他の投書の筆者に向けた感謝が述べられているが、「たいと思う」は、それに先行する下線部に現れている。

- (13) (前略) 喪中のはがきの返事にクリスマスカードを出している、という投書(11月26日)を読んだ。私もまねてみようかと雑貨店に行った。目上の人にはこのカード、などと選ぶのも楽しかった。これからはクリスマスカードを利用し、やり取りを続けたいと思う。素晴らしいアイデアをありがとうございました。 (2017/12/07「中にカード まねたい」)

4.2 「と思う」が読み手にも当てはまる一般的な内容と共に共起する場合

4.2.1 「(よ) う」と「(よ) うと思う」の比較

一方で、投書では、(14) の下線部のように、書き手の意志の表出とも、読み手への誘いかけとも解釈できる「(よ) う」の用法も見られた。

- (14) 授業中に容赦なく襲いかかってくる睡魔との闘いを、皆さんも経験したことがあるはずだ。私はそれと闘い、いつも負ける。昼食後の授業ではたいてい負ける。周りを見渡すと、私のほかにも頭をガクンガクンしている人がいる。ゲームやテレビを我慢し、家では早く寝よう努力しよう。それだけで気持ちのよい朝を迎えられ、睡魔と闘わずにすむ。(後略) (2017/08/08「睡眠は大切だ」)

(14) の下線部は、書き手のみを動作主体とし、意志の表出の意味で解釈することも可能であるが、「家では早く寝よう努力する」という内容は、読み手にも当てはまり得る一般的な内容であるため、動作主体に読み手を含ませ、誘いかけの意味として解釈することも可能である。このことは、(14) の下線部に、書き手と読み手を意味する「お互いに」を挿入しても許容されることから言える。

- (15) 授業中に容赦なく襲いかかってくる睡魔との闘いを、皆さんも経験したことがあるはずだ。私はそれと闘い、いつも負ける。昼食後の授業ではたいてい負ける。周りを見渡すと、私のほかにも頭をガクンガクンし

ている人がいる。お互いに、ゲームやテレビを我慢し、家では早く寝るよう努力しよう。それだけで気持ちのよい朝が迎えられ、睡魔と闘わずにすむ。

このタイプの「(よ) う」に「と思う」が付くと、意志の表出か誘いかけかという解釈の曖昧性がなくなる。

- (16) 私はこの前、友達に手紙をもらった。うれしかったが、読み終わった時、「え、これっておこってるのかな？」と不安になった。(中略)(手紙は)良いところもあるけれど、相手の顔は見えない。本当に気持ちを伝えたいときは会って話そうと思う。(2016/10/18「気持ち伝えるには」)

(16) の下線部では、「と思う」がない場合(「本当に気持ちを伝えたいときは会って話そう」)、書き手の意志の表出とも、読み手への誘いかけとも解釈可能である。しかし、「と思う」が追加されると、その動作主体から読み手が外され、誘いかけという解釈ができなくなり、引用節は、書き手の個人的な決意であると理解されるのである。

4.2.2 「たい」と「たいと思う」の比較

希望の「たい」の場合も、「(よ) う」と同様に考えられる。先述の通り、希望の「たい」は、その主語が一人称単数に限られるのであるが、(17) の下線部のように、読み手にも当てはまり得る一般的な内容と共に起る場合には、「たい」の動作主体に読み手も含まれると解釈され、「べき」のような当為的な意味を帯びることがある(益岡, 2006)。

- (17) 配達員が一番困るのが、指定された時間に届けても留守であることだと聞く。再配達の時指定をした場合は、家にいて受け取るのが最低限のマナーだろう。再配達が多さに現場は疲弊しているという。商品を受け取る際は、配達員へのねぎらいの言葉も忘れないようにしたい。(2017/01/12「配達員へ感謝 忘れずに」)

そこで、(18) の下線部のように、「たい」に「と思う」が付くと、動作主体から読み手が外され、当為の意味が薄れる。

- (18) (前略) 私もよく図書館を利用するが、時々、利用者のマナーの悪さにうんざりさせられる。(中略) 推理小説を借りて読み、中ほどまで進んだところで登場人物に○印が付いていて「こいつが犯人」と書き込みがあった。ワクワクして読んできた作品が急につまらなくなり、読む気がうせてしまった。図書館の蔵書は皆の財産だ。マナーを守り、気持ちよく読書をしたいと思う。(2016/07/28「推理小説 書き込みで台無し」)

5. 出現傾向とまとめ

これらの表現の出現傾向をまとめると、表 1 の通りとなる。

表 1 「と思う」の機能と出現頻度(割合)

	読み手に向けて宣言する (個人的内容と共に)	読み手を動作主体から外す (一般的な内容と共に)	合計
「(よ) うと思う」	33 (76.7%)	10 (23.3%)	43 (100.0%)
「たいと思う」	47 (71.2%)	19 (28.8%)	66 (100.0%)

表 1 によれば、投書において、「(よ) う」「たい」に付加する「と思う」は、個人的内容と共に起し、引用節を読み手に宣言する(7a)の用法として使用されることが多かった。これは、書き手の私的な出来事が書かれがちな投書の特徴によるものと考えられる。引用節の内容を読み手に宣言する「と思う」は、投書の内容が、単なる書き手の私的な出来事の報告ではなく、読み手にも当てはまり得る教訓を含んでいることを示唆し、顔の見えない読み手との双方向的なコミュニケーションを促進するのである。

参考文献

- Biber, D., & S. Conrad. (2009). *Register, Genre, and Style*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 益岡隆志 (2006). 「～タイ」構文における意味の拡張 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎(編) 日本語文法の新地平 2 文論編 くろしお出版 pp. 63-76.
- 宮崎和人 (1999). モダリティ論から見た「～と思う」 待兼山論叢 日本学篇, 33, 1-16.
- 宮崎和人 (2001). 動詞「思う」のモーダルな用法について 現代日本語研究, 8, 111-136.
- 仁田義雄 (1991a). 意志の表現と聞き手 国語学, 165, 120-108.
- 仁田義雄 (1991b). 日本語のモダリティと人称, ひつじ書房
- 小野正樹 (2001). 「と思う」述語文のコミュニケーション機能について 日本語教育, 110, 22-31.
- 小野正樹 (2005). 日本語態度動詞文の情報構造 ひつじ書房